

## kKanjiKreativ 採択 JaFIX\*式 L2 日本語教育法で「準 L1 言語習得の場」を創成する\*\*

### QUASI-L1-AQUISITION VIA JaFIX-PEDAGOGY BUILDING ON THE E-PROGRAM OF KanjiKreativ

\*JaFIX Japanese as a Foreign Lanugage with Integrative-Communicative Steps:本著者創始の統合的日本語教育法

\*\*本パネル発表は CASTEL\_J 2012 同著者口頭発表「KanjiKreativ-全常用漢文字の短期集中 E 学習法で情報処理力の早期達成を！」の発表内容を踏まえて加筆したものである

山田ボヒネック頼子 Ph.D. (社) ヨーロッパ日本語教育学研究所

European Institute for Japanese Language Education, Registered Association

**【要旨】**日本語母語者は、多少の習得順序・内容事項の相違はあれ、就学以前に L1 習得を一応完遂する。その既習領域は「聴く・話す」、即ち「口頭言語」である。次に就学以降学校教育の中で「読む・書く」、即ち「表記言語：漢字仮名交じり文」を習っていく。表記言語とは、記号学的に言うなら、脳内に蓄積された L1 音韻・文法構造を実世界に顕化させる記号体系である。従って L1 話者の日本語記号体系習得は、「マクロからマイクロへ」と記述することができる。就学前の「マクロ（口頭言語）確立」を基盤に徐々に「マイクロ（主として漢語彙群）」を拡充していくという体系発生の順を追うからである。JaFIX 式加速化 L2 教育法は、この「マクロからマイクロへ」の発生原則に沿う。習得初期段階で L2 学習者の身体内に「マクロ：口頭言語領域の確立」を図る一方、E 学習 KanjiKreativ を基盤に CIT マルチメディア活用により「マイクロ：漢語彙拡張」を仕掛ける。拠って L2 日本語授業クラスは「準 L1 言語習得の場」となる。

**【キーワード】**マクロからマイクロへ、準 L1 習得、KanjiKreativ、漢語彙習得・拡充、識字力、電筆力

日本語能力とは何か？何のために日本語を学ぶか？どのように学ぶか？-本発表者は、第 1 の問には、日本語能力とは、「口頭言語」（聴く・話す）と「表記言語」（読む・書く）を駆使できる能力であると答える。そして第 2 には「他者と交感しあうため」と答え、第 3 には「身体内に言語体系が脈打ち、口頭でも書述でも日本語で自然に語り合えるように」学ぶと答える。「KanjiKreativ 採択 JaFIX 式 L2 日本語教育法」は、これら前提 3 課題を遂行する具体的方策として発案されているが、本パネル発表ではそのうち、「マクロからマイクロへ」の L2 日本語記号発生・進化過程に焦点を当て、以下の論点を呈示し、漢字をリソースとした CIT 活用へ向けての問題提起とする。

- (1) 初期段階（習得開始 70 時間以内）で L2 学習者の身体内に「マクロ：口頭言語の確立」を図る
  - a. 音韻体系の内面化：音調具現化の前提条件として（「言語耳」錬成）
  - b. KanjiKreativ で短期間・集中的に 280 原子（漢字素=漢字最小意味・形態単位）習得：漢字構成原則認知（識字力）→漢字情報処理能力錬成へ→多読・速読法への展開
  - c. 口頭言語から表記言語へ：「先ずは音声言語の脳内刻印、次に表記言語との接触」
- (2) CIT マルチメディア活用：「マイクロ：漢語彙拡張」の仕掛け
  - i. 日本のうた（カラオケ）、小テキスト（諺、詩歌）、リラックス・テキストなど
  - ii. 新聞マルチメディア呈示ニュース（例：NHK <http://www3.nhk.or.jp/news/> など）
- (3) メール、チャットなどの交信力錬成：識字力から電筆駆使力養成へ